

# 就職活動経験がその後の生活に与える影響について

浦上 昌則 (南山大学)

The Vocational Exploration Experience and Adult Life

Masanori URAKAMI Nanzan University

The purpose of this study is to analyze what one learns through the vocational exploration experience and how what one learns affects one's later life. Subjects were forty-seven adolescents and adults (ages twenty-one to thirty-eight) consisting of twenty-three males and twenty-four females. The subjects were asked to answer the two open-ended questions; what did you learn through the vocational exploration experience? and how did what you had learned affect your life?

The lessons the subjects learned through their job search experience can be divided into six categories: (a) regrets about one's inexperience or lack of knowledge before going on interviews; (b) lessons about how to go about doing job searches; (c) knowledge about the way employers treat their interviewees; (d) knowledge about women's position in their work environment and/or society; (e) positive lessons for life in general; and (f) discovery about oneself through self-analysis and/or self-understanding.

The findings were that positive lessons for life exerted positive impacts on the subjects' lives after their job search experience. Regrets about inexperience, discovery about women's position, and self-discovery had either positive or negative impacts. Namely, these types of lessons caused them confusion, and those who coped successfully with their confusion reported that their learning positively affected their lives all in all. In contrast, those who did not cope successfully with their confusion kept suffering from the confusion for a long time. The other two types of lessons--(b) and (c)--did not have any effect.

## 1 . 問題と目的

学生にとっての就職活動は、学生生活において最も大きな意味を持つイベントといえるであろう。毎年のマスコミの報道や、授業やゼミを休んでまでも就職活動に専念する者がいるという学生自身の取り組み方から見ても、それは明らかである。このように、就職活動は学生生活の、ひいては人生の一大イベントであると言えることができる。

では、この時期に着目したこれまでの研究では、どのような知見が得られているのであろうか。これまでの研究の多くは、学校教育的または職場教育的立場に立ち、職業選択や初期キャリアにおける適応の問題など、いわゆる実践に役立つことを目的とした研究が多い(例えば、横山、1993

など)。また、就職活動中のアイデンティティ変容など、発達の視点からこの時期に着目した研究もある（例えば、高村、1997）。ところが、就職活動後の職業生活を含む生活一般との関係が取り上げられることは少ない。そのため、この点についての知見はほとんどないと言ってよい。

ところで、近年の進路指導においては、人生全体を視野に入れた指導のあり方が一層強調されている。このような指導では、就職できるか否か、どこへ就職するかといった目前の問題に過度に傾斜することはできない。その後の生活全般の中で、その指導の成果がどのように現れてくるのかという点を視野に入れた内容の構築が必要である。このような実践を支えるには、就職活動の中で、どのような変化が個人の中で起こっているのか、またそれが以後の生活の中でどのように活かされているのかといった知見が必要である。しかし前述のように、そのような知見は多くない。

そこで本研究では、就職活動の中でどのような経験をし、何を学んでいるのか、さらにその経験は以後の生活にどのような影響を与えるのかについて、事例的に検討することを目的とする。特に今回は、就職活動中にどのようなことを考え、気付いたのかという事柄の内容分析と、その経験が現在の生活にどのような影響を与えているのかという連続性についての2点を中心に分析を行う。

## 2. 方法

「就職活動を通して印象に残った出来事」、「就職活動をして気付いたこと」、「気付いたことの現在への影響」の3点についての自由記述を中心に、就職活動経験や現在の状況を問う質問紙を作成し用いた。

調査協力者へは、まず取りまとめ役を4名に依頼し、その取りまとめ役を媒介にして配付された。取りまとめ役には、20歳代から30歳代の就職活動経験者を対象に（すなわち、現在は退社して働いていない者も含む）、性別の偏りができるだけ少なくなるように配付する配慮を求めた。なお取りまとめ役中、2名は関西圏在住者（配付数30）、2名は首都圏在住者（配付数20）である。以下の分析には、47名分の回答を用いた。

## 3. 結果

### (1) 回答者の属性

分析対象となった47名の属性について、以下に簡単に触れる。性別は、男女それぞれ23名と24名であり、バランスはとれているといえる。しかし最終学歴については、大学卒業という履歴を持つ者が非常に多く（約85%、短大を含めると約96%）、実質の大学や短期大学への進学率が約40%程度であることを考え合わせると、今回の調査対象者は高学歴に偏っているといえる。この点は、結果の一般化にあたって留意すべきである。また学校での専攻については、専門学校（高専を含む）、短大、大学卒業者を対象にすると、文科系を専攻した者が32名、理科系を専攻した者が14名であった。また、現在職業を持たない者は2名であった。

## (2) 経験内容とその後の生活への影響

「就職活動をして気付いたこと」について、何らかの回答があった調査用紙のみを分析対象としているが、その内6名(約13%)の回答で、「気付いたことの現在への影響」は無いこと、すなわち、就職活動をして気付いたことは現在の生活の中では活かされていないことが明言されていた。その他の回答でも、その関連性を見いだすことが困難であるというニュアンスを持つ回答がいくつか見受けられたが、それでも何らかの関連が回答されていた。この結果から考えると、就職活動はその後の生活においても一つの経験として残り、少なからずの影響を、日々の生活の中で与えているケースは多いといえよう。すなわち、一般的にこのような連続性を仮定できると考えられる。

次に、就職活動中に気付いたことの内容と、後の生活への影響についての分析を行う。内容分類は、心理学を専攻する2名の大学院生に、「就職活動をして気付いたこと」のみについて分類するよう依頼した。なお、回答は自由記述で求めたため、個条書きであったり、一つの文章になっていたりと、様々な形態であった。そこで、一人の回答が複数のカテゴリーに重複することを認めることとした。両名の合議を経て抽出されたカテゴリーは、「就職活動について」、「会社について」、「自分自身について」および「その他」の4つである。さらに「就職活動について」、「会社について」、「自分自身について」は、それぞれ2つの下位カテゴリーから構成される。「就職活動について」は、「安易な活動」と「活動の方法」を含み、「会社について」は、「会社側の対応」と「女性という存在への気づき」を含む。また「自分自身について」は、「自分への教訓」と「自己分析・理解」の内容を含むものである。

以上の分類を踏まえ、以下では、それぞれのカテゴリー内容の要約と、その経験と現在への影響の連続性について検討する。

### 就職活動について

まず「安易な活動」のカテゴリーには、7件の回答があてはまり、「勤める気はなかった」、「何も考えていなかったような気がする」、「あまり苦労しなかった」、「あまり物事を深く考えて活動してなかったように思う」などの回答によって特徴付けられる。すなわち、就職指導で重視されるキャリア探求が、主観的判断として安易、不足であったことを報告する回答群である。そのため、就職活動をして気付いたことは、そのような活動に終わってしまった“自分自身”であるといえよう。さらにそのような活動に対して、反省的なニュアンスを含む回答が多く見られた。

一方「活動の方法」のカテゴリーには、「会社説明会では、なかなか仕事の内容とか職場の雰囲気なんかは解らないので、実際に会社見学とかOB訪問とかした方が、真実の話が聞けていいと思います」、「一生勤めることを基本と考えた場合、会社の選定に慎重になることは理解できるが、逆に、大学生が収集できる程度の情報で重要な決定を下すというのは、どうかと思う」といった回答が含まれる。すなわち、どのような就職活動が望ましいか、その方針・方法についての気づきを表明した回答群といえよう。

では、このような気付きは、現在にどのような影響を与えているのであろうか。「安易な活動」では二つの特徴が認められる。まず一つ目は、自分自身の就職活動を反省し、そこで得た何かがあるに活かされているという連続性と影響の報告である。このような内容の回答は 2 件見られ、その一つを次に示す。

#### 事例 34 (女性)

就職活動をして気付いたこと

- ・あまり物事を深く考えて活動してなかったように思う。
- ・自分のことを他者にアピールする機会が、それまであまりなかったので、そのやり方に迷った。

現在への影響

謙譲は美德ではない。しかし、自己アピールは節度が必要である。これは現在の仕事でも活かされるべきものと思う。

他の一つは、自分自身の就職活動を反省してはいるものの、そこから明確な指針が未だに導き出せていないことを示す回答群である。そのため、現在でも、別の生き方や仕事、やりたいことを考えるとといった表現が頻繁に見受けられるのが特徴的である。このような回答は 5 件見られ、以下に一つの事例を示す。

#### 事例 24 (男性)

就職活動をして気付いたこと

- ・就職を真剣に考えていなかった(当時としては真剣なつもりだったのかもしれない)
- ・自分が本当にやらねばならない事は何かという問いに、答えを出すのに一年では短すぎると思い、とりあえず就職できるところに就職することにした。

現在への影響

- ・現在も「3」のこと(「就職活動をして気付いたこと」に対する回答)を考え続けている。
- ・現在の就職をとり立てて失敗(別の企業に比べて)とは思わないが、別の生き方ができるのではないかも考えている。

このような二つの影響があることを考慮すると、安易な活動に終わってしまった“自分自身”に気付いた場合、その中で何かのきっかけとなるものを見つけた者は、反省を踏まえ、それに向かって動機づけられているようである。しかし、きっかけを見つけることができなかった場合は、何か見つけたい、何か他にあるはずだという不適合感を感じるようである。

一方、「活動の方法」に言及した回答では、これから就職しようとする学生への示唆としての言及はあるが、現在への影響についての言及ははっきりと認められない。これは、就職というものの自体が、その個人の中では完結しているためではないだろうか。

社会について

まず、「会社側の対応」のカテゴリには、8 件の回答があてはまり、「実力主義ではなく大学の知名度が大きく左右する」、「会社のずるさ」、「第 2 次は面接や筆記試験で、そこで初めて本人と対面するが、たったほんの数分だけで判断されるのがとても悔しいと思う」などの、主に選考過程における会社側の対応の特徴や傾向、それに対する意見を表明している回答群である。なか

でも、選考基準が人物や能力重視ではなく、学歴を代表とする経歴であることへの気付き、不満を記した回答が多かった。

また「女性という存在への気づき」のカテゴリーには、「いくら男女平等とはいえ、どうしても越えられないものが企業にも、そして自分の中にもあることに気付いた」、「女性を必要としている会社、部署など、それぞれの会社によってかなりちがうということがよくわかった」など、自分が女性として生きていかなければならないこと、会社組織および現代社会の中における女性の位置などについての記述が含まれる。このような回答は7件あり、全て女性からの回答であった。これは全女性被験者の約29%にあたる。

このような気付きが、現在にどのような影響を与えているかについて、「会社側の対応」のカテゴリーでは、明確な連続性は見だし難い。以下に、就職後、採用活動を行っている者の回答を示す。

#### 事例 40 (男性)

就職活動をして気付いたこと

- ・企業によって学閥の強い所、特に国公立の強い所は、面接の時点ではっきりと差を付けられました。
- ・それ以上に体育会系学生の判断基準が、一様に甘い様にも感じました。
- ・企業の人事の方の判断基準が、出身校・体育会等の、人物本位から少し離れたものに不満を感じていましたが、今考えますと、当時、自分に自信がなかった事への劣等感でありました。

現在への影響

現在の会社で採用活動も行っておりますので、就職活動をしていた当時の自分を振り返り、出来るだけ学生の立場にたつ様努めておりますが、面接時間内での判断を求められる為、書面に書かれた内容を重視せざるをえません。それを上まわる PR を面接時間内に出来る学生は、それだけ、学生時代に真剣に打ち込んだものを持っています。

この回答に示されるように、自分が就職活動を行ったときには、学歴主義の採用に不満を抱いていたが、採用する立場や会社組織の一員となった場合には、納得しているわけではないが、考え方が変化するようである。また他の回答にも、学歴については「会社に入ったら全然関係ないことがわかりつつある」といったものがあつた。これらの回答より、「会社側の対応」については、活動中に感じたことがそのまま後の生活に影響するというよりは、立場が変化することによって、それをとらえる視点が変化するため考え方が変わってくるというべきであろう。

一方、「女性という存在への気づき」のカテゴリーでは、それが現在の悩みにつながっているという回答が代表的なものであつた。一つの例を以下に示す。

#### 事例 16 (女性)

就職活動をして気付いたこと

- ・仕事を結婚までの足かけにするか、一生の仕事とするのかを考え、自分の将来の姿を思い浮かべた。
- ・“女性”という見えないベールに包まれていたが、総合職という仕事につくということは、ベールがはがされ自立して生きてゆかなければならないと不安の反面、いかに色々な事に甘えて生きてきたかを思い知らされた。

・「男性と同様の職種に就く」ということは、中途半端なことをすると「女性」全体の評価が下がるのだろう。責任を持った仕事をしようと思った。

現在への影響

基本的には「就職活動をして気付いたこと」で記入した事項に変わっていないが、就職活動の際は理想論であり、やはり「女性」には出産があり、子育てがあり、体力的弱さもあり、現実の厳しさを知った。活動中思っていた事は、心の支えである。

このような回答がいくつか見られたことから、女性を取り巻く環境上の問題は、就職後ではなく、就職活動をする中で気付くことができるものといえる。さらにこの問題は、現在でも彼女らを悩ませていることから、女性のおかれている環境は、ここ数年間は改善されていないと考えられる。しかし、これは環境の問題だけでなく、彼女らの内面にある性役割意識も大きく関係しているという点には留意しておくべきであろう。

一方、会社の中で女性がどのような部署、職務で必要とされているのかを考え就職先を決めたという者の回答には、そのことを考えて決めたため充実した生活を送っているという内容も見られた。このような二つのパターンの回答があることを、価値観を含めずに解釈することは難しいが、現状迎合的な指導的立場に立てば、就職先の選択次第で、女性という立場を生かすことも殺すこともできるといえるであろう。

自分自身について

「自分自身への教訓」のカテゴリーには、8件の回答があてはまり、「頼れるのは自分自身だけである」、「決断力が大切」、「人生、適当だけではすまない事を初めて知った」などの回答に特徴付けられる。自分自身や自分の行動などについての指針となるような気付きを得ているといえよう。

また「自己分析・理解」には、「仕事を結婚までの足かけにするのか、一生の仕事とするのかを考え、自分の将来の姿を思い浮かべた」、「自分のどういう点がアピールするのか就職活動中に気づくことができた（「商品としての自分」の自覚）」、「自分のやりたいこと、興味のあることは何なのかをよく考えた」などの自己分析・理解の促進を報告する回答と、「自分は何をしたいのか？この会社に入って、どんな仕事がしたいのか？を、もっと具体的に考えておくべきでした」といった自己分析・理解に対する反省の回答の両方が含まれる。回答数的には前者が10、後者が2であり、自己分析・理解の促進を報告する回答の方が多い。

このような気付きが、現在にどのような影響を与えているかについて、「自分自身への教訓」のカテゴリーでは、次のような回答が見られた。

#### 事例 11 (男性)

就職活動をして気付いたこと

会社は単なる入れ物であり、手段に過ぎない。自分に対する不断の努力こそが大事。

現在への影響

従業員 50,000 人以上のマンモス会社の為、会社の全体像を理解する事が非常に難しいが、逆に言うと、ここに蓄積された技術・知識は膨大である。自発的に各セクションと係わりを持

ち、常にスキルの向上に努める事で、当社のノウハウをできる限り自分の物にすべく奮闘中である。

この他にも、自分の向上心や成長、仕事をしていくうえでのモラルなどに影響を与えているという回答が見られた。「自分自身への教訓」という気付き自体が、自己指導的なものであり、それはその後の生活における指針としての影響を強く持つものといえよう。

「自己分析・理解」については、その促進の報告と、反省の報告の両方が見られている。そこで、以下にはそれぞれの例を示す。

#### 事例 27（女性）

就職活動をして気付いたこと

- ・会社を選ぶ事で、自分が何をしたいのかが分かった。
- ・面接対策の為にに行った自己分析により、自分の性格が分かった。
- ・就職難であったので特に社会のきびしさを知った。
- ・人に自分の事を伝えるむずかしさが分かった。
- ・自分の将来設計を考えた。

現在への影響

自分のやりたい事を見つけ、現在その仕事をしているので、毎日の生活が楽しいです。つらい事もあるけど、それは必ずプラスになる事であると考えています。自己分析ができたおかげで、地に足をつけて生活している気がします。

#### 事例 36（女性）

就職活動をして気付いたこと

自分は何をしたいのか？この会社に入って、どんな仕事がしたいのか？を、もっと具体的に考えておくべきでした。

現在への影響

会社で毎日忙しく働いていると、3で書いた事（「就職活動をして気付いたこと」に対する回答）は、どんどん忘れ去られていってしまいます。ただ、与えられた事だけをして満足するのではなく、自ら、仕事をつくり出すことが大切であるとは、今も思います。

以上の例のように、自己分析や理解が進んだと気付いている場合、その回答の多くが、気付きの影響で仕事や生活に積極的に向き合っているという内容であった。一方で、反省を報告する回答では、二つの回答ともに、仕事や生活における停滞感や、それらに積極的に向き合っているとはいえないニュアンスを含むものであった。自己分析や自己理解は、就職指導において重要視される点である。これは特性・因子論的な考え方にに基づき、適職を選択するためであるが、今回の結果からは、自己分析や自己理解は、選択した仕事の中での自己成長意欲にも影響を与える可能性を持つものであることが示された。

## 4．考察

以上、得られた気付きについての回答を6つのカテゴリーに分類し、現在への影響との関連を検討した。その結果を踏まえて、いくつかの特徴的な関連性を指摘できよう。以下には、この点をまとめる。

まず、就職活動の現在への影響が肯定的な場合を考えてみる。このような結果につながりやすい気づきとしては、最もその傾向が強いものとして「自分への教訓」を指摘できよう。次に、「安易な活動」、「女性という存在への気づき」、「自己分析・理解」が考えられる。しかし、これらに気づけば、必ず現在への影響が肯定的になるとは言い難い。結果の部分で記したように、これらの気づきには二つのパターンを指摘することができる。すなわち、このような気づきは個人に混乱をもたらすものであり、その混乱の中から自分にとっての指針となるようなものを導き出せた場合と、そうではない場合に分けられる。そして、前者、自分にとっての指針となるようなものを導き出せた場合には、それが現在に肯定的影響を与えるようである。これとは逆に、就職活動での気づきが現在の問題、混乱につながっている場合が存在する。「安易な活動」等に気づき、かつその気づきから自分にとっての指針となるようなものを導き出せなかった場合、その混乱は不満足感、不充足感などにつながっているようである。

上記の二つのパターンに含まれない、「活動の方法」、「会社側の対応」は、就職活動後の生活への影響力が弱いようである。これは、他の気づきとの比較から、状況限定的な気づきであるためと考えられる。

このようなパターンがある事を職業指導的観点から考えると、一つの重要なポイントを導くことができよう。すなわち、「安易な活動」、「女性という存在への気づき」、「自己分析・理解」といった気づきを経験した場合、またそれらの気づきが混乱を引き起こした場合の指導的対処である。従来、自分自身や仕事環境の理解を目的とした情報提供が、就職指導の中心的な指導法の一つとして行われてきた。これが適職探索に有効であることは疑いないが、個人の中で混乱が継続していく可能性については配慮がなされてこなかった。このような混乱が残ることは、厳密に言えば、仕事を選ぼうとする者と仕事のマッチングが完全に行われていないことを示すのであろうが、混乱の残らないマッチングを行うことは非現実的でもある。このように考えると、職業選択以上に、生涯を見通した進路指導を目指す場合、就職活動において何かに気づくことのみならず、その気づきが個人にもたらすもの（例えば、混乱）に、どのように対処するかという点を重視しなければならない。指導対象である者に与えた情報、キャリアカウンセリングの内容、活動を通して自身で気づいたものなどの刺激に留意しながら、指導を行うことが望まれよう。

今回の調査は、被験者数が限定されており、一般化を行うには十分でない。今後は、被験者数、被験者層を拡大する必要があるだろう。また、就職活動時に受けた指導の影響も考慮する必要がある。生涯を見通した進路指導を構築するために、このような研究を重ねていく必要がある。

## 参考文献

- 高村和代 1997 課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて 教育心理学研究 45, 243-253.
- 横山明子 1993 進路決定における意思決定モデル学習の効果 帝京大学理工学部研究年報人文編 3, 161-178.